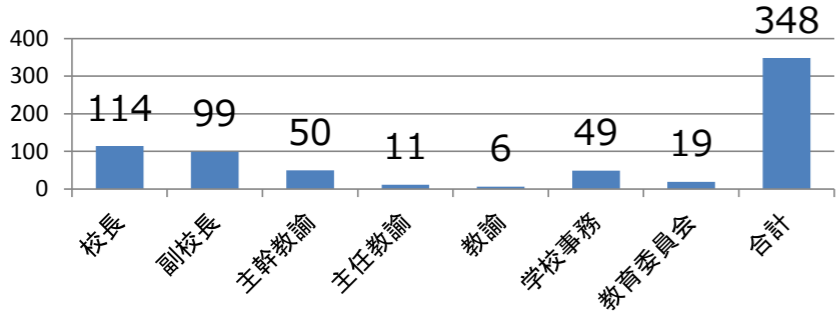
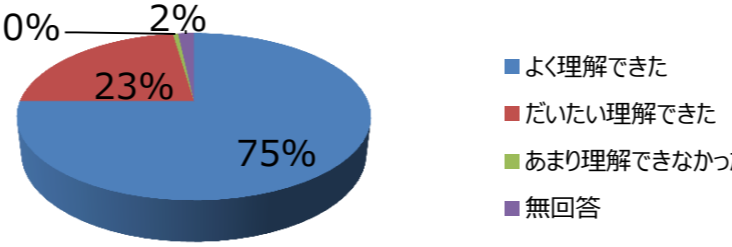
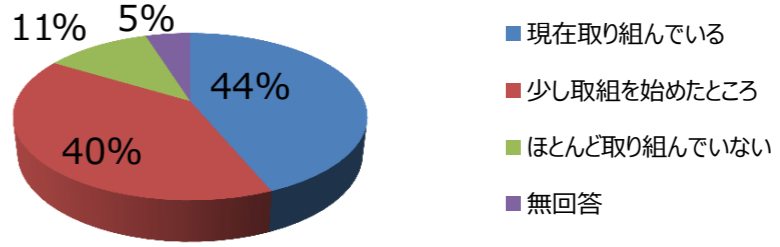
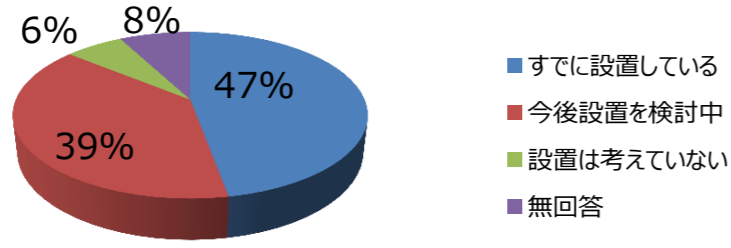
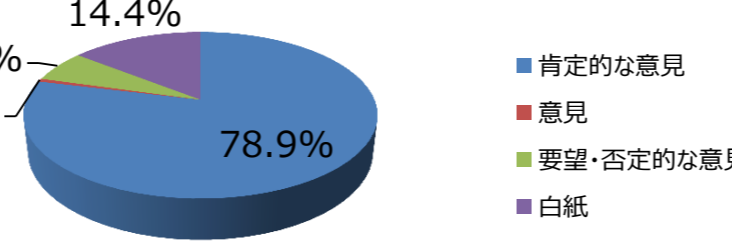
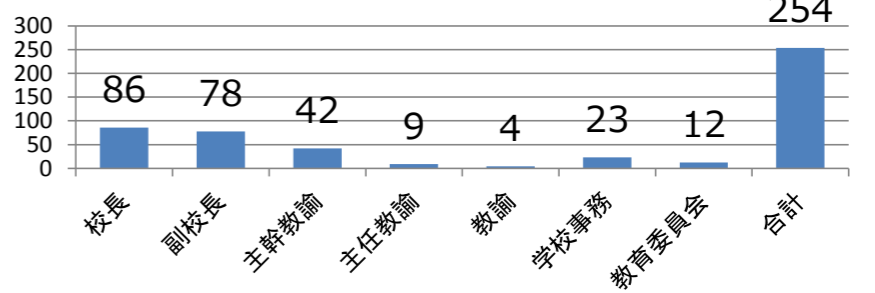


<h3>全参加者中の各職層の人数（348人中）</h3>  <p>&lt;考察&gt; 管理職の参加が多い。主幹教諭の参加者も他の教員より多くなっている。また、学校事務や教育委員会関係者など、事務方の参加者が5分の1近くあり、この職層の校務改善に対する関心の高さが伺える。</p>	<h3>1 校務改善の必要性について</h3>  <p>&lt;考察&gt; 9割以上から肯定的評価を得ることができた。本事業発表会が、参会者の校務改善に対する意識を高めることにつながったと言える。</p>	<h3>2 校務改善の取組の状況について</h3>  <p>&lt;考察&gt; 8割以上の学校が「取り組んでいる」、「取組を始めている」と答えている。すでに取り組んでいる中で、具体例や取組の工夫を求めて参加している様子が推察される。</p>
<h3>3 経営支援部の設置について</h3>  <p>&lt;考察&gt; 半数近くの学校が、経営支援部を設置している。設置を検討している学校も多い。一方、設置を考えていない学校の理由としては、「小規模校である」という意見が見られた。</p>	<h3>感想の内訳</h3>  <p>&lt;考察&gt; 肯定的な内容のものが、8割弱と大変高く、本事業発表会の内容が各校にとって有意義なものであったと判断する。</p>	<h3>「肯定的な意見」の職層（254人中）</h3>  <p>&lt;考察&gt; 参加者の職層の人数に対し、ほぼ比例していると言える。ただ、学校事務の人数は他の職層に比べて低い。</p>
<p>&lt;アンケートの自由記述より&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 校務改善の一番の意義は、副校長を中心に、教職員全員がやりがいを持ち、意欲的に仕事に取り組める環境づくりができるということであると感じた。（校長）</li> <li>○ 今後も何のために、誰のために学校があるのかという原点を忘れずに、校務改善を進めていきたい。（校長）</li> <li>○ 「校務改善」というと、いかに楽をするか、仕事の軽減のために…というイメージが強かったが、校務改善の取組を通して、教職員の組織の見直しと組織力をアップするということを感じた。（副校長）</li> <li>○ 校務改善とは、子供たちのために行われるものだということが改めて分かった。すぐ実践できる校務改善は小さいものであるかもしれないが、推進していく価値を感じた。（主幹教諭）</li> <li>○ 校長の経営方針を具現化するためには、トップダウンの方向性だけでなく、各分掌からの提案があるような仕組み、しかけを設定することが大切なことが分かった。（主幹教諭）</li> <li>○ 業務・役割の見直し・精査を行うことの大切さを改めて感じた。個ではなく組織として取り組むことを意識することで、組織が活性化し、職員一人一人の意欲が向上し、一体感も生まれ、効率よい学校運営につながると感じた。（事務職員）</li> <li>○ 学校と教育委員会を合わせた大きな視点、業務の分担、役割の明確化が大切だということを感じた。（教育委員会）</li> <li>○ 学校における校務改善の推進には、校長先生のリーダーシップが重要であるとの感想をもった。また、その校長先生を支えるために、地区の教育委員会の支援が必要であると感じた。（教育委員会）</li> </ul>		
<p>&lt;全体の考察&gt; 数値からも、アンケートの感想の記述の内容からも、本発表会の事例発表や質疑応答を通して校務改善の必要性を再認識したり、自校の取組に生かせるアイデアを得たり、自校の改革に向けて意欲を高めたり、といった参会者の意識を前向きに高めることができたと言える。今後も、様々な先進的かつ実行力のある事例を収集し、広く周知していく必要がある。</p>		